

「マザーライブラリー」 顛末

山中一弘

大きな川のそばに住んでいる男がいた。

ある日、豪雨が降り、川が氾濫しそうだとラジオの放送が警告した。

しかし男は、「私には信仰がある。神が助けて下さる」と言って避難しなかった。

救助隊の舟が現れ「川が氾濫するぞ。助けてやろう」と言った。

男は「私は毎日神に祈っている。神が助けて下さる」と救助を断った。

今度は上空にヘリコプターが現れた。

「そのままじゃ溺れるぞ。助けよう」

男は「神が助けて下さる。必要ない」と言った。

男は死に、天国の門で神に訴えた。

「私は毎日あなたに祈っていた。私のような信心深い者を、なぜ助けてくれなかったのですか」

すると神は言われた。

「最初はラジオ、次に舟、そしてヘリコプター。私はお前に三度も助け舟を出したが、お前はすべてのすべてを無視したじゃないか」

〔神様の助け舟の冗句〕 出典不明

IN LOVING MEMORY
OF
SAMUEL LIVINGSTON MATHER
FOR MANY YEARS
A DELEGATE TO THE GENERAL CONVENTION
OF HIS CHURCH
AND ALWAYS A SINCERE FRIEND AND SUPPORTER
OF ITS FOREIGN MISSIONS

サミュエル・リヴィングストン・メーザーを記念して
長年アメリカ聖公会の総会代議員であり
つねに外国伝道のよき友であり支援者であった

本学が池袋に移転した当初から図書館および事務棟として利用され、一九六〇年に丹下健三設計の図書館が建設された後は「図書館旧館」と呼ばれた煉瓦造の建物（一九一九年完成）は、現在、立教学院史資料センター事務室・書庫、立教学院展示館事務室・展示室として使われている。

その二階展示室に通じる階段の踊り場には、上記の英文を記したタブレットが設置されていることから伺えるように、同館は Samuel Livingston Mather を記念して息子の Samuel Mather が寄附したものである。

長い時を経た二〇一二年の秋、池袋キャンパスに新しい大学図書館が開館したのに伴い、「新館」「旧館」は、ともに図書館としての役割を終えた。そして「旧館」は大学によって正式に「メーザーライブラリー記念館」と命名された。

ボストンのマザー家

森本あんり『反知性主義』（新潮社二〇一五年）は、アメリカ合衆国の歴史にしばしば現れる、知的な聖書理解・神学理解に批判的な熱狂的信仰覚醒運動とその担い手などについて書かれた、アメリカ宗教史の労作である。

同書の冒頭近く（p.39）で森本は、ハーヴァード大学が設立当初から牧師養成の「神学校」であると同時に多

分に世俗的な面をあわせ持ち、当初はリベラルアーツの学位のみを授与していたこと、そして伝統的な「大学」の名に相応しく神学・医学・法学などの学位を授与することを意識し、十七世紀末になって初めての神学博士号をインクリース・マザー（当時の学長）に授与したこと、などを紹介して、英国のケンブリッジ大学（当時卒業生がすべて聖職籍を取るのが建前だった）との比較においてハーヴァードの世俗性を際立たせた描写をしている。これがその後のアメリカにおける聖職、説教、信仰のあり方の問題に繋がるのだが、ここで同書に触れたのはこうした宗教史の記述が目的ではない。

「インクリース・マザー」、「神学博士」、「ハーヴァード大学」（マサチューセッツ州）。

筆者はしばし本筋から離れ、ここに目を奪われた。

それはいまから五年か六年も前のことだったか。キャンパスで偶然ドノヴァン氏（Herbert A. Donovan III. 総長室調査役、経営学部講師）に会い、立ち話の中で「十七世紀か十八世紀のボストンに、有名な牧師でコットン・マザーという人がいた。図書館旧館のメーザーと同じ綴りMatherで、おそらく図書館の寄贈者であるMather家も、マザーと読むのが正しいはず」という情報を頂いた。

驚いてただちにコットン・マザーについて調べたのだが、当時の力量不足から、ボストンの牧師と本学図書館寄贈者 Samuel Mather およびその父 Samuel Livingstone Mather の関係は明らかにできなかった。

しかも、固有名詞に関することなので、同じ綴りで違う発音というケースもおそらくあるのではないかと考え、その時点で深追いすることを諦めてしまったのだ。

今回、筆者はたまたま手に取った宗教史の書籍に現れた「インクリース・マザー」というハーヴァード大学の神学博士」に関する記述から、「コットン・マザー」というボストンの牧師」の記憶を呼び覚まされ、嫌な予感に突き動かされて改めてその家系についての調査を試みた。

まず手っ取り早くインターネットで「インクリース・マザー」を検索した。数あるサイトの中から「コトバンク」という日本語サイトを見てみると、「世界大百科事典 第2版」の解説が抄録されていた。念のため図書館で現物に当たると、確かに以下の記述が見つかった。

「マザー家 アメリカ、ニューイングランド植民地の代表的聖職者の家系。親子孫3代のマザーは、いずれもマサチューセッツ湾植民地のピューリタン体制の擁護に全力を傾け、頑迷な保守派とみなされるが、宗教上のみでなく知的にも多大の遺産を残した。初代のリチャード

Richard Mather (1596-1669) は1635年イギリスから移住し、会衆派教会の基礎を築くのに貢献した。2代目のインクリース Increase M. (1639-1723) は、ボストンで牧師として説教に生涯をさげたが、ハーバード大学の学長や対本国交渉の植民地代表を務めるなど広く活躍した。3代目のコットン Cotton M. (1663-1728) は強い自負心に比して、時代の推移により影響力の低下は否めなかった。(略) (『世界大百科事典』第27巻(平凡社一九九八年))

コットン・マザーについて検索すると、これもかなり多数のサイトがヒットしたが、“Rev. Cotton Mather, Salem Witch Trials”という見出し語には正直驚いた。ここではコットンがインクリースの息子であり、悪名高いセイラム (Salem) の魔女裁判に関わっていた牧師であることが延々と述べられていた。またこの時点で、コットンにはサミュエル・マザー Samuel Mather というやはり聖職者の息子がいることも判明したが、十七世紀生まれのこの男が図書館のサミュエルであるとするには、いささか年代が古すぎる。(Geni's Genealogy Database: <http://www.geni.com/people/>)

本来の順序とは逆かもしれないが、『キリスト教人名辞典』(日本基督教団出版局 一九八六年)で「マザー」を引くと、「マザー (メイザー)、インクリース」(「同」

コットン」(「同」リチャード)の親子三代、いずれも十七ー八世紀の著名な聖職者として紹介されていた。そしてこの辞典の凡例によれば、「(人名カナ表記は)慣用的な表記と異なるものには、検索に支障のないように入見項目✓を多数収録した」とあり、試しに「メイザー」を引くと、「Mather → マザー」とある。この辞典が Mather の読みを「マザー」と認定し、「メイザー」を日本での「慣用」と位置付けていることが分かる。

サミュエルの家系へ

では図書館のサミュエルはこの誰なのか。今度は“Samuel Mather”で絞り込んで検索した。

これについても多くのウェブサイトが見受けられたが、図書館寄贈者の年代として相応しい十九世紀後半から二十世紀前半の著名な Samuel Mather に限って言えば、全てのサイトが、オハイオ州クリーヴランドと関係のある一族を示していた。

中でも、研究図書館コンソーシアムという最も信頼性が高い情報源であろう“Ohio Link - Ohio's Academic Library Consortium”(Ohio LINK Finding Aid Repository: <https://www.ohiolink.edu/xftfeed/>)のサイトには、Western Reserve Historical Society が所蔵している

“Samuel Livingston Mather Family Papers”, “The Mather Family Photographs” や “Samuel Mather Record Book” などの資料それぞれの概要を記したページが見つかった。

これらの資料概要のみによっても、Samuel Livingston Mather (一八七〇—一八九〇) という人が一八四七年にクリーヴランドに住み着き、Cleveland Iron Mining Company 創業メンバーの一人となったこと、彼の一番下の息子が Samuel Mather (一八五二—一九三二) であること、この Mather 一家はクリーヴランドの素封家である、古い時代のニューイングランドのマザー家と関係がある、すなわちインクリース、コットン等のボストン・マザー家の子孫であること、などが明らかになった。

並行して、クリーヴランド州立大学 (Cleveland State University) の図書館 The Michael Schwartz Library が設置する “The Cleveland Memory Project” (<http://www.clevelandmemory.org/>) 担当の司書ビル・バロウ (Bill Barow) 氏にメールを書き、上記の Samuel および Samuel Livingston とボストンのマザー家の関係、そしてクリーヴランド Mather の正しい発音について問い合わせた。

その結果、クリーヴランドの Mather 家はインクリースやコットンの子孫であり、発音は同じくマザーである

(“We pronounce it the same as his ancestors, Increase and Cotton. Sort of combination of “mathematics” for the “ma” part and “mother” for the “th” part……)”) の回答を得た。

さらに、立教学院史資料センターが編集した『THE SPIRIT OF MISSIONS 立教関係記事集成 第4巻』(立教学院二〇一二年) 所収の大学池袋キャンパス落成に関する記事(同誌一九一九年九月号)には、図書館寄贈者サミュエルがクリーヴランドの人であるとする以下の記述が見られる。“Balancing the chapel is the library and administration building, Mather Hall, the gift of Samuel Mather of Cleveland.”

加えて、『立教大学新聞』一九二五年五月一五日号には、図書館寄贈者のサミュエル・「メーザー」氏が来学したとの記事が掲載されている。

これらの情報を総合すると、本学が一九一八年に池袋へ移転した際に、父親サミュエル・リヴィングストンを記念した図書館を寄贈してくれたサミュエルとは、クリーヴランド鉄鉱会社創業者のサミュエル・リヴィングストンの息子、一八五一年生まれで一九三一年に亡くなったサミュエルであり、その正しい名前はサミュエル・マザーであると言って間違いであろう。

つまり、立教大学の図書館だった煉瓦建築の名称は、

「メーザーライブラリー」ではなく、「マザーライブラリー」であったのだ。

この話を旧知の元職員に話したところ、そのことなら二年ばかり前にアメリカ人のチャプレンが学内誌に書いていた、と教えられた。

雑誌「立教」第二二七号（立教大学二〇一三年）所収のエッセイ、「チャプレン室コーナー 恵み深いコネクション」（マーク・シユタール司祭）だ。迂闊なことに、筆者はこの記事を見逃していた。

このエッセイの中でシユタール司祭は、自らの出身大学であるケース・ウエスタン・リザーブ大学（オハイオ州クリーヴランド）のキャンパスには Mather の名を冠した建物が複数あり、それらは “mæda”（マザー）と発音し、“meða”（メーザー）ではなかったこと、そして同大学に名を残す Mather 家は、本学に図書館を寄贈してくれた Mather 家であることを述べておられる。（司祭のカタカナ表記には「マザー」と中に長音記号が入っているが、文中に示された発音記号を見ると「マザー」がより近い表記であろう）

ドノヴァン調査役の話とシユタール司祭のエッセイ、そして森本あんりの著書。

神はわれわれに、三度にわたって助け舟を出されたのだ。

この三艘の舟を生かすことが出来ていないことが、悔やまれる。

「メーザー」の起源

ではなぜ本学関係者が、元図書館の寄贈者を「メーザー」と呼んでいたのか。

当センター宮本正明学術調査員に依頼してできる限りの用例調査を試みたが、結論を言えば「誰がいつ始めたか」について確かな資料は見つからなかった。

確認できた最初の邦文学内文書は『立教大学新聞』第14号（一九二五年四月五日）で、関東大震災後の改修になった図書館についての記事である。

〔略〕アメリカの有名な富豪で立教の発展を常に念頭に置かれて居るメーザー氏が修繕費一切を寄附されて成ったもので、氏を記念する為にメーザー氏図書館と名付けられるとのことである」とあり、「メーザーライブラリー」の名が震災後の命名であるらしいことがうかがえる。

同紙第107号（一九三一年二月二日）には、ポール・ラツシュがアメリカの友人に図書の寄贈を願う書状

を書いたとの記事があり、「我が大学の図書館はサミュエル・リビングストン・メイザア氏記念のためサミュエル・メイザア家の寄付建立にかかるもので…」との記述がある。

「メーザー」「メイザア」と表記は揺らいでいるが、いずれも「マザー」に類するものでないことは確かであった。

なお、ほぼ同時代の『朝日新聞』（一九一一年四月二〇日）には、「英国の教育家サー、ウィリアム、マザーが普く世界の工業教育機関を比較調査し…」との記述が見える。このウィリアム・マザーはおそらく“Sir William Mather (1838-1920), mechanical engineer and textile equipment manufacturer. (略)” (*Oxford Dictionary of National Biography*, Vol.37, Oxford University Press, 2004) のこと。『朝日』の書く「マザー」がサミュエル等と同じ姓 “Mather” であることが推測できる。

つまり「メーザー」は時代の癖といった類の表記ではなかったのだ。

池袋に移転した二〇世紀初頭の立教大学には、首脳陣をはじめ多くのアメリカ人教師・聖職者が在籍していた。

図書館寄贈者サミュエル・マザー本人とも直接交流があったらしい彼らが「メーザー」と発音していたと考え

るのは、かなり無理がある。

おそらくは、日本人の誰かが言い始めたのだろう。

しかし、「メーザー」表記に先立って使用された「マザー」表記の用例が発見できていない以上、最初の「メーザー」の用例を特定することは、今回はできなかった。今後の課題とさせていただく。

(立教学院史資料センター課長)